

農林漁家民宿 支援セミナー①

～豊島に息づく自然、豊かな食の資源を活かした魅力の創出～

農家民宿 講師

「とくと」

講師 / 濱中玲子さん



島の未来につながる夢を、この宿から

【とくと】INFORMATION

2021(令和3)年、豊島において築80年余の古民家を再生活用し、農林漁家民宿『とくと』を開業。「瀬戸内の島時間をとくとお楽しみください」との思いをコンセプトにした民宿は、現在、人気を博し国内外から多くの旅行者を受け入れられています。



なぜ私が「ふる里 豊島」で、民宿を始めたのか

皆さま、こんにちは。私は合同会社『とくと』の濱中玲子と申します。最初に簡単な自己紹介をさせていただきます。私は元々豊島で生まれ育ち、高校3年生になる年にオーストラリアへ留学しました。オーストラリアの高校、大学ではホスピタリティとホテルマネジメントを学び、地元エコツアー会社でガイドをしたり、インバウンド旅行会社にてツアー企画のプランニングなど、様々な経験をしました。

現地で結婚を経て、2017年の私自身の出産や豊島の父が体調を崩したことをきっかけに、故郷に帰ることを決めました。本日は、なぜ私が民宿を始めて、どのように宿泊者の方と日々過ごしているか、また他の民宿の経営者の方たちと、どのように連携し活動しているかをお伝えしていきたいと思っております。



講義内容を、わかりやすく伝える濱中さん

この島で、私に何ができるんだろう

私が帰国してまず考えたのは、体調を崩した父を身近において「島で私に何ができるんだろう」ということです。そこで、島の今をしっかりと見ようと思いました。

当時、皆さんもご存じの通り豊島を含む瀬戸内海では『瀬戸内国際芸術祭』が開かれるようになっていて、島には豊島美術館も建設され、予想以上の観光客が連日訪れていました。しかし、高松から30分、宇野港から40分というアクセスの良さが逆に作用し、お客さまは通過することが多く、島内消費は観光客が来ている割には「向上していない」と感じました。また、外国人旅行者の方が、島内のインフォメーション不足により困っている姿が多く目に留まりました。



民宿開業を目指す参加者たち。真摯な表情が印象的。

課題に向き合い、解決につながることをやりたい

豊島の民宿経営者の人たちを見れば、皆さん楽しそうに運営はしているけれども、体験プログラムに手が回らなくなっていることを知りました。その他、豊島以外の島も知名度を上げ始め、豊島が話題となる機会が減っているにも関わらず、地元の行政機関は産業廃棄物の問題など、日々の課題の対応が忙しく「島の未来を考えている時間が少ないのではないか」と感じました。

自分がこの島でできること、そのためにはこれらの課題にしっかりと向き合い、解決につながることに取り組まなくてはならない。私はそう考え、行動に移しました。

オーストラリア留学の経験を活かして民宿を

私が豊島の未来のためにできること。この思いがたどり着いた答えは「オーストラリアで培った語学力や、旅行業、ホテル業に関する知識を活かすこと」でした。そこで色々な旅館業を調べた結果、インバウンドに特化した農林漁家民宿の開業を目指すことが最適と思い、合同会社『とくと』を立ち上げました。そして、今注目のアートによる観光振興だけでなく、「豊島に昔からある自然、豊かな食の資源を生かすこと」こそ大事だと考えて、そのための活動と持続可能な観光開発をおこないたいと思いました。それらを実践し「島再生のチカラ」になるため、私は島内の事業者や民宿の経営者たちと連携し『てしま農泊推進協議会』を立ち上げました。



外国の方に「COOL JAPAN」を実感させる、枯山水の庭

外国人旅行者に気をつけている、4つのこと

ここからは『とくと』で、外国人旅行者との関わり方についてお話をしていきたいと思っております。『とくと』でお客さまとの関わり方に対して、特に気をつけていることが4つあります。

まず1つ目は「あるもの」と「ないもの」をしっかりと伝えることです。先ず「ないもの」ですが、豊島には、スーパーもコンビニもありません。タクシーも1台しかありませんし、夕食も予約をしないと食べられません。次に「あるもの」として、宿では美味しい寛ぎを提供するためエスプレッソマシンを置いたり、ハーブティーをご用意しています。移動に便利なレンタサイクルショップをはじめ、おすすめのレストランのご紹介など「ここがいいですよ」「こんなところがありますよ」と魅力的な施設等のご紹介ができます。このように、お客さまへ事前にしっかりとした情報を伝えることで「Less is more(少ないほうが豊かである)」という価値観をもって、島を有意義に楽しんでいただける旅行となるよう心がけています。

2つ目は「歓迎されていることを伝える」ことです。お客様へのサービスとして、うちではお客さまを必ず港までお迎えに行きます。人と人とのやさしさある繋がりを実感していただくことで、大きなホテルとの差別化を図るのです。この人と人の距離の近さを感じていただくことが、私たち農林漁家民宿を営む者にとって重要なポイントだと思っています。

3つ目は、「ここだけのおすすめを教える」ことです。東京や大阪を観光した後、豊島にやってくる外国人観光客の多くは「島の自然の豊かさ」や「人との絆の素晴らしさ」を求めてやってきていていると思います。だからこそ、ガイドブックに載っていないような素敵なビーチや絶景スポットを教えることで、お客さまの満足度が上がっていくと考えます。

最後となる4つ目は、嗜好に合った体験プログラムのご提供です。うちでは旬の野菜の収穫やヤギのえさやりなど、お客さまの要望に合わせた体験プログラムを提供しています。また同時に、お客さまからいただいたお声を傾聴し、新しいツアーの開発も行っています。



オーストラリア人の夫が、大きなチカラ

『とくと』を支えているといっても良い、私の夫。オーストラリア人である彼の助言は『とくと』の大きなチカラとなっています。彼には日本人では気づけない「外国人好みの宿の工夫」を実践してもらっています。先ず「とくと」の庭ですが、宿の目玉となるこの場所の管理は完全に夫に任せています。開業前から庭造りを担当している彼には「私が想い描くような『立派な庭』ではなく、外国人が思う瀬戸内の風景を作ってください」というお願いをしました。すると見事な庭を作ってくれたのです。それは、日本人のイメージする枯山水とかけ離れていながら、外国人には「Wow! COOL JAPAN」となる庭。和と洋が融け合う素晴らしい世界です。

その他にも彼の発案で外国人の多くは、ベッドがあることに魅力を感じることを知り『とくと』の本館には、キングサイズのベッド、別館にはクイーンサイズのベッドを用意しております。また、水回りの清潔さを保ち、シャワーの水圧は強め、大きなバスタブも本館に設置しました。さらに豊島を訪れる外国人旅行者は2週間ぐらいの期間をかけて旅行されている方が多いので、洗濯乾燥機を準備。これが決め手うちの宿を選んできたという方もいらっしゃいました。食事については、朝食は焼き立てのパン、手づくりヨーグルト、ジャムなどを用意して、好きな時間に食べていただいています。ゆっくりと流れる島時間をより優雅に楽しんでもらいたいですからね。忙し過ぎる旅は外国人旅行者、特に欧米豪からの旅行者には好まれないので、私たちはゆとりと“余白のある旅を提案”して、宿での時間を楽しんでいただいています。

ごみ問題で苦しんだからこそ、伝えられるものがある

『とくと』では、外国人の方に伝える工夫がもう1つあります。現在、豊島を訪れる方の目的は、豊島美術館の鑑賞がメインとなっていて、豊島に「産業廃棄物が不法に投棄されて、ごみの島と呼ばれていた」ことは外国人のほとんどが知りません。豊島のイメージが良いイメージに染まることは素晴らしいことですし、うれしいです。しかし、ごみ問題で苦しんだ豊島だからこそ今の姿や、伝えられるものがあるのではないかなとも思っています。私は、自然豊かな豊島でアートに触れるだけではなく、「ごみ問題を体験した歴史」にも意識をシフトしてもらい「島への関心を広く深くしてもらえればいいな」と、いくつかの取り組みをしています。たとえば、宿に隣接する一反の耕作放棄地を開墾し、生ごみ処理機を導入。循環型農業を取り入れた農業を始めました。現在は一反の半分を畑、半分を果樹園、そしてその隣でニワトリも飼っています。近くの里山も徐々に開墾して、ヤギの飼育を始めます。このイベントは、除草のお手伝いでも活躍してもらっています(笑)。本館にもこれら太陽熱とガスを用いた「ハイブリッド給湯器」なども導入しています。いずれも1つひとつは本当に小さなことですが、お客さまと滞在中にこれらの様々な体験とおして私たちの思いを共有できたいと思っています。

このような取り組みを重ねながら、インバウンドに特化した宿を提供している『とくと』ですが、稼働率にも徐々に成果があらわれ始めています。2022年10月の水際対策規制が緩和されて以降、2023年4月には、多くの旅行者の方に滞在していただきました。数字的には本館、別館合わせた稼働率が88%で、そのうちの90%の宿泊客が外国人旅行者でした。

てしま農泊推進協議会とともに活動しています

次に民宿開業と共に取り組んだ『てしま農泊推進協議会』についてお話をさせていただきます。『てしま農泊推進協議会』と、立派な名前ではありますが、民宿5件、飲食店2件の、とても小さな協議会です。本協議会は豊島に永く根付いてきた豊かな自然と食の資源を生かしながら、農林漁家民宿の推進に取り組む私たち自身が考えるための組織として立ち上げました。そして、農泊を推進し国内外からの宿泊需要を取り込むことで、私たち島民が豊かな暮らしを営み、持続可能な地域経済の実現を目指し、活動しています。

私どもの民宿以外の4軒の民泊は、皆さん10年以上も農林漁家民宿を営んでいる大先輩です。会長の生田は、曾祖父の時代から続く漁師であり、遊漁船の登録、地引き網の許可も保有しております。濱中は、役場の職員で町議を務めていました。緋田は郷土料理の名人、山根が自家栽培した野菜でつくる夕食やお惣菜も人気です。このように特色あるメンバーのおかげで、発足以来、順調な活動が続いています。



各々が得意分野を持つ、てしま農泊推進協議会の皆さん。

未来につながる夢を、実現するために

そして、いま私たちは美術館を訪れた人が豊島に泊まりたくなるように、素敵な『美術館の次の日』を作る活動をしています。そのプランの目玉として2023年からミニ地引き網体験の提供。週末には地元の子どもたちを招いて地引き網をするなど、私たちもとても楽しみにしている行事です。一緒に地引き網を実施することで、協議会の構成員の生きがいの創出にも繋がっていくのではないかなとも思っています。

このほかにも協議会として取り組んでいるもの、また、今後取り組んでいきたいものもあります。このように小さくても、継続して活動をおこなうことで、地域のDMOや旅行会社からお声をかけていただくこともあり、現在はプライベートジェットで日本を旅するような超富裕層をターゲットにしたツアーの開発などもおこなっています。

その他にも、完全非対面の宿の運営、ペットと一緒に泊まれる農泊、農家レストランなど、皆の「こんなことしよう、あんなことしよう」に、笑顔と積極的な気持ちで取り組んでいます。



豊島に泊まりたくなる魅力作り。地引き網体験も、そのひとつ

『とくと』も、『てしま農泊推進協議会』も、いまはまだ小さな存在かも知れませんが、一人ひとりが豊島の未来のビジョンを持ち、仲間と語り合いながらチカラを合わせることで、少しずつでも夢を実行していきたい。

そして、そのための活動を、私はこれからも続けていきたいです。

本日は皆さま、ご清聴ありがとうございました。